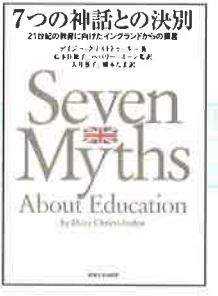
著者は、ロンドンの中等学校で3年間教鞭をとった後に「教育」について研究しており、「教師が教育について教えられていることの多くが間違いであり、効率的でない方法で教えるように勧められている。」と主張している。そして、学校現場で最も害をもたらすと思われる、①事実学習は理解を妨げる、②教師主導の授業により生徒は受け身になる、③21世紀はすべてを根本的に変えてしまう、④調べようと思えばいつでも調べられる、⑤転移可能なスキルを教えるべきである、⑥プロジェクトとアクティビティが学びの最良の方法である、⑦知識を教えることは洗脳である、を「神話」として取り上げ、教育における様々な知見と現場での経験等を踏まえて、「神話を支えている理論」「教育現場における実践」「なぜこの神話が誤りなのか」を論じている。



7つの神話との決別
21世紀の教育に向けたイングランドからの提言

デイジー　クリストドゥールー　原著
松本佳穂子、ベバリー・ホーン　監訳
3024円　東海大学出版部
☎0463-58-7811

例えば、第2章では、神話を支えているルソーやデューイ、フレイレ等の理論や子ども達が主導権を持つ授業を教師に要求している助言を「現場の実践」として示し、それを「神話の誤り」として、教師による教えは自立した学習者になるためにも絶対に必要だと主張している。

一例として「子ども達は言語に接触すれば、その言語を話し、理解する力を身に付けることはできるが、読み書きの能力や、スペリングや句読法を正しく身に付けるためには、正式で明示的な指導が必要である。」と、子どもの言語教育について分析し、教師による教えが必要である証拠として挙げている。

教育に携わる者として、不明瞭な理論を間違って理解していたことを認識するとともに、現在の学校教育における課題や教育の本質について考えさせられる1冊である。

（愛知教育大学教授・高橋美由紀）